

国内経済情勢

概観

商品市況は、繊維の一部などを除き回復歩調を続けている。これは、供給面の抑制を主軸に、官公需の漸増、一部民需の立ち直り気配など、需要面の動きもあって、商品の需給関係が総じて改善の方向に向かっているためとみられる。ただ企業経営面には、採算の立て直しなどなお問題も少なくなく、企業の投資態度は慎重であり、資金需要も鎮静を続けている。

国際収支は、貿易収支の受超幅が拡大したため、資本収支が再び赤字に転じたにもかかわらず、黒字となった。

商品市況は総じて回復歩調を維持

2月から3月にかけての商品市況をみると、主力商品である鉄鋼をはじめ、多くの商品は堅調を続けており、一部の商品を除けば、需給バランスは引き続き改善の方向に向かいつつあるものと思われる。

現在までのところ、こうした地合いの好転も、供給面の抑制に負う面がまだ大きいようである。しかし、官公需が次第に増勢を強めてきているのに加え、一部の商品(鉄鋼、紙、軽油など)に対する民需にも、需要業界の業況持ち直し気配を映じて多少の動意が生じつつあり、このような需要面の動きが、ある程度市況に響きはじめていることも見のがせない。こうした動きのなかであって、

2月に仕手筋の介入などから反発した繊維(綿糸、スフ糸)は、実需の低調を背景に、3月にはいり再び弱含みに転じている。

2月の本行卸売物価は、上記商品市況の動向のほか、とくに上旬までの非鉄の急騰が響き、前月比+1.0%と前月に引き続き、大幅な上昇を示した。3月上旬は、鉄鋼などの小幅上伸にもかかわらず、非鉄の下落もあり、前旬比保合いにとどまった。

2月の消費者物価(全国)は、野菜、魚介類の上昇に加え、私鉄運賃の値上げもあり、前月比+1.1%の続騰となった。3月(東京)も国鉄運賃の値上げなどで、前月比+0.6%の上昇となった。

製品在庫の調整は引き続き進捗

鉱工業生産(季節調整済み)は、1月+3.6%の著増のあと、2月は速報で、-1.9%の減少となった。ここ一両月のこのような大きな振幅は、多くの業種で、生産調整が続けられているため、例年1、2月に大幅にみられる季節的な増減が弱められていることによるもので、2月の計数が低目にていることは否めない。生産の実勢は、需要面に若干動意のみられはじめた自動車、家庭用電機、石油、合繊、建設用鋼材などを中心に、多少とも強含みに推移しているものと思われる。

鉱工業出荷(季節調整済み)は、1月+4.6%の著伸のあと、2月は速報で、-1.3%の減少となった。これにも、季節調整上の問題があり、その実勢は、引き続き持ち直しの傾向にあるものとみられる。一般資本財は、電力向け大型機械の減少

を主因にかなり落ち込んだが、自動車、建設資材などは引き続き増加している。

2月の鉄工業製品在庫(季節調整済み、速報)は、-1.8%の減少となった。製品在庫率も-0.6%の低下となり、在庫調整は緩慢ながら進捗しつつあるものとみられる。とくに、自動車の在庫はここ一両月急減を示している。

一方、設備投資の動向をみると、先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)は、ならしてみると、このところやや強含みとなっている。しかし、2月調査の本行「主要企業短期経済観測」や「中小企業業況予測」などによると、企業の投資意欲は、総じてなお鎮静を続けているようである。

企業の資金需要は総じてなお動意薄

2月の銀行券は、前年同月を上回る発行超(506億円)を示し、財政資金もまた前年を多少上回る揚超(1,493億円)となった。これに対処して、本行は、売却手形の買戻し(1,500億円)や、債券の無条件買入れ(額面562億円)を行なったほか、短資業者向け一般貸出を実施するなど、弾力的な態度で臨んだため、金融市場は、おおむね平穩裡に推移した。

2月の全国銀行貸出増加額は、1,265億円と前年同月を若干下回った。金融機関の貸出態度は、総じて積極的であるが、大企業を中心に手元現預金がかかなり潤沢化しているうえ、当月は不要資月という事情もあって、企業の資金需要は、なお低調に推移している。

なお、長期国債は、1月に引き続き2月には250億円、3月には150億円発行された。このうち、証券会社によって一般に売り出された分(2月40億円、3月29億円)も、個人層を中心に、順調に消化された。

貿易収支は引き続き好調

2月の外国為替収支をみると、経常収支は、貿易収支の好調(黒字109百万ドル、季節調整後約160百万ドル)を主因に、66百万ドルの黒字となったため、資本収支が、為替銀行の輸出手形買持増などから、再び赤字(24百万ドル)となったにもかかわらず、総合収支は27百万ドルの受超となった。

2月の輸出は、前年同月比、為替で+18%、通関で+9%と高水準を続けた。季節調整後の前月比は、為替、通関とも減少しているが、これは、1月の輸出が海員ストライキの反動増で、異常に高かったためであり、輸出好伸の基調に変わりはない。為替ベースによって品目別にみると、とくに電気通信機、自動車などの機械類が、米国向けを中心に好調であり、また鉄鋼、水産品なども持ち直しぎみとなっている。先行指標である輸出信用状、輸出認証も、欧米諸国向けが好調のほか、韓国、中共向けの増加もあって、前月に引き続き水準を高めている。

2月の輸入は、前年同月比、為替で+19%、通関で+13%とかなり高い伸びを示しているが、これは、前年水準が米国港湾ストライキの影響で、異常に落ち込んでいたためである。季節調整後の計数でみると、為替については、海員ストライキに備え昨年末にかけて行なわれた繰上げ輸入の反動で、ここ一両月は、むしろ実勢より多少低目になっているとみられる。当面輸入の急増は予想されないが、原燃料などでは、在庫水準がかかなり低下し、しかも消費はいくぶん増加の気配にあるので、輸入水準も、徐々に高まっていくものと思われる。輸入信用状や輸入承認などの先行指標をみても、鉄鋼原材料や原油を中心に、いくぶん強含みを示している。

(昭和41年3月29日)